

〔翻訳〕

ハンスIIゲオルク・ホルヴェック著

「クルト・ゲルシュタイン (Kurt Gerstein, 1905-1945) を記念して  
——人間的理解を超えた人物」〔二〇〇七年〕

山崎 和明<sup>†</sup>

## はじめに〔訳者解説〕

本邦訳は、ハンスIIゲオルク・ホルヴェック氏の「クルト・ゲルシュタイン 神の遣わした密偵（スパイ）」という二〇〇七年六月二〇日の講演原稿の邦訳である。ハンスIIゲオルク・ホルヴェック氏の「クルト・ゲルシュタイン研究」サイトには、二〇一〇年四月二八日付のほぼ同じ内容の独文原稿とその英訳とが共にアップロードされている [http://www.hans-georg-hollweg.de/Kurt\_Gerstein.html]。

本邦訳では、「クルト・ゲルシュタイン研究」サイトに掲載されている二〇一〇年度版の原稿を参考にしながら、生き生きとした講演原稿〔二〇〇七年六月二〇日〕を訳出した。新しい二〇一〇年度版の原稿では、若干、校訂された箇所

---

<sup>†</sup> YAMASAKI, Kazuaki 本学社会学部教授、法学博士

所「段落、数字、綴りなど」がある。翻訳に際しては、当然、新しい二〇一〇年度版で校訂された箇所を取り入れた。しかし、二〇一〇年度版では、講演当時（二〇〇七年）の事情や地域の事情を伝えるローカルな部分は大幅に割愛されている。それらを、研究上、省くことはしのびず、本邦訳には記録として残すため、二〇〇七年度版を底本とした。もっぱら両稿が補完し合うように心がけて訳出した。

本ゲルシュタイン講演には、ホルヴェック家の話が出てくるため、予め、その家族構成を紹介しておく。ホルヴェック家の家族構成は、当時、次のようであった。

父エルンスト「医学博士」と母ヘンリエッテには、四人の子供がいた。両親は、〈告白教会〉の熱心で活発なメンバーであった。告白教会は、〈指導者原理〉や〈反ユダヤ主義〉を標榜するナチ体制を支持する〈帝国教会〉に抵抗していた。

第一子で長女のインゲは、一九二一年生まれ、医学博士。二〇〇九年一月二六日に死去している。

第二子で長男のディーターは、一九二五年五月五日生まれ。一九五二年に若くして白血病を患い、二七歳でこの世を去っている。ディーターは、一九三六年にツインクストで休暇中に、クルト・ゲルシュタインと知り合った。

第三子で次男のアールントは、一九二七年生まれの神学博士。アールント・ホルヴェック博士のゲルシュタインに関する論文については四国学院大学社会学研究科『紀要』六号（二〇〇六年三月）に「人間学的、神学的認識の基本問題——クルト・ゲルシュタインの生涯の歩みと証言行動を手がかりに——」と題して拙訳、紹介した。

第四子で末っ子の三男ハンスIIゲオルク「本稿の著者」は、一九二九年八月二二日の生まれである。

次男のアールントによれば、四人の子供たちの中で末子のハンスIIゲオルクがクルト・ゲルシュタインと個人的に緊密な関係にあったという。というのも、長男のディーターと次男のアールントは、一九四二年にはすでに召集されていた。アールントは、初め空軍の見習い。後に前線へと送られた。しかし、末子のハンスIIゲオルクはまだ少年で、両親の家におり、ゲルシュタインが訪問した際の個人的な関係を記憶しているのは彼しかないという。

## 「神の遣わした密偵」<sup>スバイ</sup>

ご来聴の皆様、私は、今日ここでクルト・ゲルシュタインについて話すことを許され、クラウゼン博士に感謝いたしております。クラウゼン博士は、ピエール・ジョフロワ著の同名書籍からの印象もあって、私の講演にも（クルト・ゲルシュタイン 神の「遣わした」<sup>スバイ</sup>密偵）という演題を提案して下さいました。

クルト・ゲルシュタインを描き出し、分り易く彼を説明することは大変難しい課題のひとつです。なぜなら、私たちの規範からすれば逸脱している事柄が余りにも沢山存在しているからです。私は、歴史的、哲学的あるいは宗教的な命題を用いてこの課題に取り組もうとは思っていません。むしろ全く単純に、私が個人的に体験した事柄をもとに進めようと思います。

どうしてクルト・ゲルシュタインは、メンヒェングラットバッハ (Mönchengladbach) にやって来たのでしょうか。私の兄のデーターは、一九三六年にバルト海に面するツィンクストにある告白教会立の青年施設にいました。そこでクルト・ゲルシュタインは、データーと恐らく心の通じ合う関係を結んだのです。両親に会ってみたいというゲルシュタインの希望を、いつ兄が電話で親に伝えたかは知りません。結びつける絆となったのは、告白教会でした。告白教会は、祭壇にヒトラー像を立てていたドイツ的キリスト者に反対する者たちの運動でした。クルト・ゲルシュタインは、私の母親がナチスを徹底的に拒絶していることに感動していました。その結果、ゲルシュタインは何度も我が家にやって来たのでした。当時の政治的状況下では、いつも小声で話さねばなりませんでした。それは、私の両親の家では無理でした。父は第一次世界大戦以来、難聴になつていたからです。父が私たちの口許から多くのことを読み取るために、家では私たちは常に大声ではつきりと語らねばなりませんでした。クルト・ゲルシュタインとの話題を他人に聞かせられない場合、両親は私たち子供をその会話の中に入れてくれました。というのは、もし私たち子供が扉の前で聞き耳を立てて聞いてしまったとしたら、子供たちが、そのことを外でべらべらと話してしまう危険性が生じるからです。危ない話題であれば、クルト・ゲルシュタインと私の両親は強制収容所送りになつていたでしょう。それで、私たち子供

にも、秘密を守る義務が生じたのでした。

クルト・ゲルシュタインは、私たち子供にとっても好かれていました。私たちは、ゲルシュタインを、あたかも家族の一員のように、ファッティ「父親の親称。第二の父親のような存在と信頼関係があったという」とかドウ「二人称の親称」と、親しく呼ぶことが許されていました。当時、ドウと呼び交わすのは、ほとんど家族の者に対してだけでした。ゲルシュタインは、沢山のいたずらや冗談を教えてくださいました。しかし彼は、私たち子供の主張を真剣に受け止め、話の中に入ってきてくれました。ある夜のことを忘れられません。おそらく一九四〇年ころで、私は一一歳でした。クルト・ゲルシュタインは、志願してSSに入隊するつもりであることを、私の両親に話しました。東部でどのように戦慄すべき出来事が起こっているのかを、その目で確かめねばならないというのでした。強制収容所における集団大量銃殺刑や名状しがたい残虐さについての悪い噂を耳にしていました。いつもはゲルシュタインのことをよく理解していた私の母が、急に感情を高ぶらせ、厳しい口調で言いました。「あなた「二人称尊称」には、奥さんも子供もいます。そんなことをしてはなりません」と。私は、それまで母がクルト・ゲルシュタインとあのような感情的議論をしたことを見たことがありませんでした。それで、あの夜の記憶は、今も刻み込まれています。クルト・ゲルシュタインは、ナチの舞台裏の出来事を誰かが直視し、その犯罪を明らかにせねばならない、と繰り返し言っていました。それで、フランス人伝記作家ジョフロワは、ゲルシュタインのことを「神の密偵<sup>スパイ</sup>」と呼んだのです。

ここで、簡単にクルト・ゲルシュタインの生涯についてお話しします。彼は、ミュンスターの名門に七人兄弟の第六子として、一九〇五年八月一日に生まれました。彼の父は、地裁の裁判長でした。クルトは一風変わった子供でしたが、とても知的でした。学校では——ゲルシュタイン自身もその頃のことについてよく話してくれました——子供たちを興奮させるような、沢山のいたずらで際だっていました。クルトの父が「ベルリン北西の」ノイルピンに転勤した際、彼はキリスト教信仰へと向かいました。ノイルピンの教区監督の息子たちの影響を受けて、彼はYMCAと子供聖書サークルに加わりました。高校を卒業して、アーヘン、マールブルクそしてベルリンの大学で鉱山学を学びました。アーヘンでは、オランダ人のヘルマン・ユビンクと出会いました。彼はのちに、ゲルシュタインにとって重要な役割を果たし

ました。一九三一年にクルト・ゲルシュタインは、工学士として大学を卒業しました。その後、一九三五年一月まで鉱山技官補になる職業訓練を受けました。一九三三年五月には、父や兄弟たちと一緒にナチに入党しました。聖書サークルがヒトラー青年団のために解散させられ、ヒトラー体制に対する失望がたちまち訪れました。ヒトラーは、一九三三年に権力を手にした時、《積極的キリスト教》を支持すると宣言していました。「《積極的キリスト教》とは、後の《ドイツ的キリスト者たち》の主張するようなキリスト教でした。」

告白教会が一九三四年に設立され、カール・バルト（スイス人）やマルティン・ニーメラーも深く関与していました。告白教会は、ヒトラー像を祭壇に掲げるドイツ的キリスト者に真っ向から対立していました。古グラットバッハの長老や牧師の多くも、ヒトラーに欺かれた多くのキリスト者たち、たとえば私の両親も、告白教会に連なりました。父は、医師として第一次世界大戦時、自動的に将校となりました。そして後に、ナチの禁止した鉄兜団のメンバーになりました。父と母は、選挙ではナチ党ではなくドイツ国家人民党に票を投じました。私の両親は、ナチ党にもその諸組織のいずれにも属していませんでした。機械的に母親に対して贈られた功労十字勲章を、母は侮辱と受け止めていました。

ゲルシュタインに話を戻します。一九三五年一月三〇日に騒動が起きました。ハーゲンにある劇場で民族主義的・異教的悲劇（Witekind）の公演中に、クルト・ゲルシュタインは、こうした現代ゲルマン作品の反キリスト教的台詞に対して、大声で抗議しました。彼は、殴り飛ばされ、歯を二本失いました。劇場勤務の警察官は、見て見ぬふりをしました。それが、ナチドイツにとって理想的な良き民族同胞なのでした。

一九三六年にゲルシュタインは、告白教会の印刷物を配布しようと、ドイツ鉱山労働者組合総会を利用しました。彼は《逮捕され》、ザールブリュッケンの刑務所に保護拘禁になり、四週間後に釈放されましたが、ナチ党からの除名と国家公務員職の解雇（就業禁止）命令を受けました。

デュッセルドルフのある会社の遺産から、彼はわずかばかりの年金を得ました。それで彼は、一九三六年にテュービンゲンで医学の勉強を始めました。一年後、彼は親友の妹、エルフリーデ・ベンシュと結婚しました。結婚式では、後に監督となる、告白教会の指導的人物の一人オットー・ディベリウスが司式をしました。

価値なき生命の安楽死〔計画〕が始まった時、多くのキリスト者は、それでナチスに対して何ら共感できなくなりました。私の父が理事であつた〔メンヒェングラットバッハにある〕ヘファタ施設もまた脅威に曝されました。教会の司教が語る一言が、この頃――ナチスにとつても――どれほど決定的であつたかを証明しています。ミュンスターの司教、クレメンス・アウグスト・グラーフ・フォン・ガーレン（一八七八―一九四六）の司教教書が出されて後、初めて安楽死計画は中止されました。この頃、カトリックとプロテスタント（以下、福音主義）教会はまったく関係を絶つており、むしろ敵対関係にありました。しかしカトリックの司教教書は、メンヒェングラットバッハのシラー通りにある福音主義教会長老の教会管財人（Kirchmeister）のヴァルター・ベイ（Bay）の事務所で複写されました。私の兄二人と私や他の若者たちは、複写教書をどの郵便受けに投げ込めばよいかの住所録をそれぞれ得ていました。実にこれは、私たちホルヴェック家の子供たちの最初のエキクメニカルな活動であつたと言えます。

クルト・ゲルシュタインは、ハダマーにおいて執行された安楽死計画によつて、近親のおば（実際は、妻の姉、ベルタ・エーベリンク）を失いました。彼はシヨックを受けましたが、自分に何が出来るのか分かりませんでした。一九三八年七月、彼は再び、反国家的活動のゆえに逮捕され、シュトゥットウガルト近郊のヴェルツハイム強制収容所に入れられました。彼の家族がナチ黨員とのコネを利用して、一ヶ月だけの勾留ですみました。

一九三八年九月、クルト・ゲルシュタインは国外から、アメリカにいたロバートおじさんに宛てて、自分が福音主義青年教義学習・教育の帝国委員会理事であると手紙を書き送りました。文字通り引用すれば、彼は次のように書いています。「私たちはナチズムを政治的に肯定してききました。しかし私たちは、宗教的関わりにおいて極めて巧妙に騙されてきたことを確認しなければなりません。ナチズムの全体主義的要求は、人の肉体と魂を余すことなく捕まえ支配しようとしています」。彼は長い手紙の中で、緊急の場合、おじさんが自分を受け入れてくれるかどうかを注意深く問い合わせました。

戦争が勃発して、ほとんどすべてのことが表に出ることなく、支配体制の背後に隠されました。教会は伝統から、戦地に赴く者を祝福し、戦勝を祈願しました。告白教会もそれを行っていました。

二年後、ゲルシュタインは武装親衛隊に志願しました。このことは、彼の友人のほとんどにとって謎であり理解できないことでした。それまで反ナチ的であつたにもかかわらず、彼は入隊できました。彼は、発疹チフスと腸チフスという疫病とたたかい、成果を上げたため、親衛隊の中で非常に早い昇進を遂げました。一九四一年六月より、彼はベルリンにある武装親衛隊の衛生学研究所で働いていました。間もなく親衛隊下級中隊指導者〔SS Untersturmführer 少尉相当〕に昇格しています。彼は業務上、いろいろの所に出張することが許され、私の両親と意見交換するために、再三メンヒェングラトバッハへ寄り道をしました。私たち子供でさえ、彼が親衛隊将校としてスパイ行為をしていることを分かっていました。そのことが私たちには、彼をいっそう興味深い人物にしていました。

一九四二年一月、彼は衛生技術局長になりました。一九四二年六月八日に「ユダヤ人問題の」最終的解決を伝える使者がやってきました。ゲルシュタインは、上級中隊指導者の〔Obersturmführer 中尉相当〕ギンター（・ロルフ）というアイヒマンの副官（Adjutant）から、青酸を調達してベルチエクに搬送する任務を受けました。有害動物〔害虫〕を駆除できる者はまた、人種上の有害人種をも根絶やしにできねばならないのです。健康な体に感染させてはならないのです！この出張報告にはぞつとさせられます。ゲルシュタインは、自分が見たことをまったく理解できませんでした。彼が自分の目で見た残忍で想像を絶するような一つ一つの事柄が、一九四五年のゲルシュタイン報告に記されています。私は、その報告書に関心のある人々のために複写しました。ゲルシュタインは、マールブルク大学〔衛生学の正〕教授のプファンシュティールと一緒に、犠牲者がガス室に追い込まれる前の戦慄すべき準備〔段階〕を監察したのです。そしてこの二人の訪問者は、監視窓を通してガス室の中のもつとも哀れな者たちが窒息するのを見届けました。プファンシュティールは、死にゆく者の悲鳴を「シナゴークの中で鳴り響いているようだ」と評して片付けています。この人は、戦後も学生たちに職業教育をすることが許されていません！

一九四二年八月二〇日、ワルシャワからベルリンへの帰路、ゲルシュタインは列車の中で、ベルリン駐在のスウェーデン大使館の書記官、フォン・オッター男爵と出会いました。戦後、オッターは「ゲルシュタインに小声で話させるために、ひたすら苦勞した」と語りました。ゲルシュタインは泣きながら、ユダヤ人や他の仲間たちの名状しがたいガス

殺の残虐さを説明しました。彼はフォン・オッターに、急いでこの情報を外国に伝達するように願いました。彼は、とりわけ収容所への進入経路を爆破するように願いました。なぜなら新しい列車が、犠牲者をぎゅうぎゅう詰めにして、毎日強制収容所に到着していたからです。「神の代理人」という映画では、そのような輸送列車が出てきます。往路は苦しむ人たちを詰め込み、復路は空っぽでした。それは残忍な映像でした。映画を見終えてから、久しく夜ごとに列車が走っている夢を見続けたほどでした。ゲルシュタインは、主に、デイペリウスやニメラーのような教会関係者に情報を提供しました。彼は強制収容所に捕らわれていたニメラーを訪ねています。さらにベルリンにあるスイス大使館の広報官D・シュトラッサーに、ベルリンのカトリック司教法律顧問ヴァンター博士に、とりわけエーレルスや多くの彼の友人にも情報を提供しました。しかし、全員が沈黙しました。一九四二年、ほとんどのドイツ人にとって、ユダヤ人はもはや隣人ではありませんでした。一〇年にわたる反ユダヤ主義的な集中砲火や、三年も継続している戦争、そして日々の困窮、ただでうんざりしていました。西洋のキリスト教国は、ユダヤ人が根絶やしにされている時、沈黙する見物人にすぎませんでした。

プロテスタントのゲルシュタインは、カトリック教会に向かいました。具体的には、ローマ教皇大使チエーザレ・オルセニゴでした。オルセニゴは、エウジェーニオ・パチエッリの後任で、パチエッリは一九三九年にピウス二世として教皇に選出されました。パチエッリは、すでにヒトラー政権前からベルリンの教皇大使でした。そして一九三三年七月二〇日にヒトラーと政教条約を結びました。「ゲルシュタインが」ローマ教皇大使館を訪問した時に何が行われたかは、残念ながら今日に至るまで一〇〇パーセント明らかではありません。ゲルシュタインは、「ナチの」犯罪を公表しようという考えにとりつかれ、自分の報告を伝えました。彼は、再び自分の命を危険にさらしました。一人の親衛隊将校が教皇大使館で何を得ようと試みたのでしょうか。クルト・ゲルシュタインは、とりつかれたようにナチの犯罪を明白にしようと、あえて危険を受け入れたのです。

何百万人もの人間が組織的に、何年にもわたって根絶やしにされてきたことを、知られないままにしておくわけにはゆきませんでした。それにも拘わらず多くのドイツ人は、この報告書を敵対的プロパガンダと切り捨ててきました。文

化民族であるドイツ人に、そのような犯罪をおかせるはずはない！というわけです。ゲルシュタインは繰り返し、ちょうどワルシャワ・ゲットーの指導者アダム・チエルニアクフ（一八八〇—一九四二）のように、ドイツ上空から連合軍がまいたようなビラについて考えています。ドイツ国民は真実を知らなければならぬと。ゲルシュタインは、ヒトラーを暗殺することについては何ひとつ考えていませんでした。そんなことをすれば、総統を殉教者にするかもしれず、ヒトラーに忠実な者たちは、残忍な政策を推し進めるかもしれないと。ゲルシュタインは、連合国がドイツに勝利することによってのみ悲惨な状況は終了すると考えていました。

ガーレン司教は、ユダヤ人殺害に反対する言葉を見出せませんでした。カトリックの司祭、ベルリンの聖ヘトヴィクス大聖堂の主席司祭ベルンハルト・リヒテンベルクは、説教壇からフォン・ガーレンの言葉を有効に生かしてユダヤ人のために語りました。彼は、一九四三年ダッハウ〔強制収容所〕への移送中に亡くなりました。そして彼はその後、聖人として公式に認められました〔列聖〕。

数え切れないほどの殺人について、公表されることはありませんでした。連合国と中立国のスポークスマンたちは、「ナチの」犯罪についての様々な資料が報告されていながら、沈黙していました。一九四二年七月、ロンドンのポーランド亡命政権は、戦争が勃発してから七〇万人ものユダヤ人が殺害されたと公表しました。

クルト・ゲルシュタインにとって、とても重要な個人的つながりは、学生時代の友人ユビンクでした。ユビンクは、一九四三年二月にベルリンのゲルシュタインを訪問しています。そのとき、最初のゲルシュタイン報告ができました。ユビンクは、オランダの抵抗組織経由で、ゲルシュタイン報告を英国に送信するつもりでした。オランダへのゲルシュタイン報告の存在は、何十年も疑問視されてきました。一九九九年になって初めて、二人のオランダ人、ヘンク・ビアシュテーカーとベン・ファン・カームの尽力によって、ロンドンのオランダ亡命政府が、絶滅収容所の名前とその位置そして毎日ガス殺される割合を記したゲルシュタインの最初の報告を、一九四三年以降知っていたことの証明がなされました。この報告はさらにロンドン、ワシントン、コペンハーゲンそしてベルリンの諸政権へ伝えられました。二人のオランダ人はさらに、オランダの抵抗運動がどこで集まっていたのかを探しました。それは、ドエスブルクのある納屋

でした。この古い建物は、ほとんど解体されていましたが、幸い、まだ撤去されていませんでした。「そして入念に調査し、」その屋根瓦の下に、オリジナルのゲルシュタイン報告原本を見つけたのでした。

なぜ連合国は沈黙し、ナチの犯罪を知らながら何もなかったのかについては、意見が大きく分かれます。絶滅収容所への進入経路が爆破されることも、こうした情報を記したビラがまかれることもありませんでした。連合国のまいた大量のビラには、別の事柄が記されていました。私は、戦争中頻繁に、友人と自転車に乗って、戦闘機編隊が配備されているホルトの飛行場近くの畑に行き、こうしたビラの情報を集めたことを今もよく覚えています。もちろん、そうしたことは当時、厳禁でした。

一九四三年の夏休みに、私は、ベルリンで牧師をしていた父方のおじのところで一週間過ごしました。私は、衛生学研究所のクルト・ゲルシュタインを訪問しました。私の母の教育の成果もあって、「皆さん、おはようございます（グーテン・モルゲン）。ゲルシュタイン博士に面会できますでしょうか」とそこで言いました。するとすぐさま、「お前は、ハイル・ヒトラーと挨拶できないのか、ゲルシュタイン上級中隊指導者と呼べないのか」と、強いおしかりを受けました。私は肩をすくめ、こう聞きました。「私が、皆さんに良い一日を願うことに何か問題があるのでしょうか。私はラインラント地方から来ました。ここでは皆がそのように挨拶しています」と。するとファッティ（ゲルシュタイン）がやって来ました。彼は軍隊式にかかとを合わせ、腕を上げて「ハイル・ヒトラー、ハンスⅡゲオルク」と挨拶をしました。そして彼は、すぐさま私を自分の部屋に連れ込み、言いました。「お前は、何が行われているか理解しなければならぬ。ここでは嘘偽り（偽装）なしでは何一つ達成できない」。それから彼は、私の両親のためにポーランドの絶命収容所についての詳細な情報をくれました。オランダの友人がゲルシュタインの報告をロンドンに届くように手配してくれるようだ等々。彼は、いつ家に帰るのかと尋ねました。私は、三日後と答えました。それに対して彼は、何日かすれば私はすぐメルセデスでクレーフェルトに向かうが、私と一緒にメルセデスで行かないかとたずねました。私は、当然喜び、興奮しました。彼が両親に宛てる秘密事を私に託した時のように、私は彼に、車の中では彼と運転手だけしかいないのかと問いました。というのも、私は彼の運転手が告白教会に所属していることを知っていたからです。し

かし、答えは否でした。他に二人の親衛隊の将校が同行するようでした。私は少し考えた後、「ファッティ、分かるかい、そんなに長い道中では、まずいことを口に出してしまいかねないから、むしろ汽車で帰る」と言いました。

ファッティらしいことですが、彼は私の言うことを真剣に受け止めてくれ、決して強要しませんでした。三日後、私のいとこが駅まで付いてきてくれました。それは、すし詰めの汽車の中で、せめて窓際の立ち席だけでも何とか確保するためでした。いとおかげで、わたしは荷物を持たずに窓をよじ登ることができました。何分かつて、拡声器から「ハンスIIゲオルク・ホルヴェック、乗車していたら申し出てください！」と聞こえました。それを聞いて、私はびっくりしました。おそろおそろ名乗り出ました。一人の親衛隊員が私に走って近づいてくるのを見ました。不安から、できれば身を潜めたい気持ちに駆られました。きつと青ざめていた私の顔を見て、私の手をトントンとたたいて言いました。「ファッティがお前にさよならを言いたい」と。それは、あの運転手さんでした。するとファッティも駆け寄ってきて、車中で食べる弁当を持ってきてくれました。常にストレスに満ちた状況に置かれていてもなお、彼は、この一三歳にしかない子供のことを考えてくれていました。こうしたことは、いかにもゲルシュタインらしいところでした。家に帰って母に、超満員の汽車に代わって、素晴らしいメルセデスと一緒に帰るよう誘われたことを話した時、母は、自分の教育の成果を誇りに思ってくれました。

ゲルシュタインからの報告に基づいて、私の父が、領邦君主への恭順というルター主義的伝統を破り、ユダヤ人の隠匿を助けたということを、一九四二―四三年に私は驚きとともに確認できました。私の父はこのことを、長老会の小さなグループ、すなわちヴァルター・ベイ、ハインリヒ・ローゼンラント、カール・ヴィースナーそしてレーマン牧師とヴァイス牧師の助けによって実現できました。父は申し合わせた通り、魚屋のホルンを病人と称して、オランダ国境に連れて行き、彼は国境を通過できました。そしてそこで彼は自分の逃げ場を見つけたのです。きつと多くの人がご存じで、後に市の惨事会員となり、ドレスデン銀行頭取となったシュピーゲル氏が、ある日曜日の午前に父の所に来ました。彼は翌日、ゲシュタポに出頭せねばならないようでした。父は、シュピーゲル氏に私の自転車を与え、自宅に戻ってはならないと言いました。父は彼とヴァルトニールで会う場所を申し合わせました。そして、自分は後から車で行く

と言いました。はじめシュビーゲル氏は、ヴァルター・ベイ博士夫妻が「空襲で焼け出され」ハリク湖畔に移り住んでいた所のポート小屋に身を潜めていました。しかし数ヶ月後にシュビーゲル氏は、そこを立ち去らねばなりません。なぜならナチスが、ヴァルター・ベイの義兄で、後のグラットバッハの文化局長 (Kulturbedeuten) のハンス・シュミットを捜索していたからでした。父は、シュビーゲル氏をグラットバッハに呼び戻しました。彼は、二人か三人の信頼できる教会員の所に身を潜めました。ブリュッヒャー通りの私たちの家に、シュビーゲル氏のために必要な物資が集められ、そして私は、時に応じてそれぞれの家に必要物資を運ばねばなりません。そうしたときにも私は、大きな不安を克服してきました。その際、私にとって模範となったのは、つねに私のファッティでした。

ゲルシュタインが情報を提供した領邦教会監督ヴルムは、一九四三年七月、書面で総統に「特権的非アーリア人」「アーリア人との婚姻によるユダヤ人配偶者たちとその子供たち」に対する寛大な処置を求めました。教会に好意的な帝国官房のある官吏は、この書簡を破棄しました。もしそうしなかったら、確実にヴルム監督は即逮捕されていたでしょう。

ゲルシュタインは、抵抗グループのクライザウ・サークルの人たちと連絡をとっていました。しかし彼は、七月二〇日事件に参画しませんでした。すでに申しましたように、彼は、ヒトラーを暗殺しても何の効果もないと考えていました。

一九四四年になると、彼が訪問してくることはめっきり少なくなりました。一九四五年には皆無でした。ところが一九四五年三月二六日に突然、彼は、妻と三人の子供たちが住むテュービンゲンに現れました。しかし彼は、可能な限りアメリカ側に出向こうと、さらに西に向かいました。「途中」フランス軍に出くわし、彼は収容され、ロットヴァイルのモーレン旅館の一室を得ました。一九四五年五月、有名なゲルシュタイン報告を書くために、彼は、その土地の牧師のところで、旅行用のタイプライターを借りました。報告書には多くの版、すなわちドイツ語、フランス語、英語の版がありました。コピーを一つ、ゲルシュタインは、私の父に郵送しました。手紙は、一九四五年七月か八月になってやっと届きました。私は、郵便受けからそれを取り出し、「ファッティは生きている！」と両親の所に駆け込みました。残

念ながら、そのときにはすでに、彼は死んでいました。

ロットヴァイルから、彼は、バリのシエルシェ・ミデイ軍刑務所に移送されました。彼はそこで、戦犯容疑で告訴されました。その嘆かわしい最後がどうだったのか、今日に至るも明らかにされていません。軍刑務所の文書は百年封印されています。今年の受難節の聖金曜日に放送される番組映像のためにARTE「独仏共同出資の放送局」が例外的措置を獲得すると期待していました。しかし、うまくいきませんでした。一九四五年以来、ファッティの友人たちは、彼が自殺したと語ってきました。彼の妻エルフリーデを除くゲルシュタイン家の大半の人は、彼は殺害されたと言ってきました。

クルト・ゲルシュタインが死ぬちょうど二日前に、フォン・オットー男爵は、苦勞してゲルシュタインの居場所を捜し出しました。一九四五年八月七日、ランガーフェルト男爵は、スウェーデン政府の委託を受け、ロンドンの外務局にクルト・ゲルシュタインについての陳情書を提出しました。しかし、ユダヤ人のためには三年、クルト・ゲルシュタインのためには、一三日遅すぎました。

その後ドイツ連邦共和国では、様々な訴訟が行われ、ゲルシュタインは有罪となりました。彼の妻エルフリーデは、年金を取り消されました。彼女は、不屈の精神で「夫の」名誉回復のために戦いました。私は、戦後、何度か彼女を訪問しました。彼女の息子アルヌルフは、学期の休暇中、私たちの所に住み、「アハターとエーベルス」で働いて金を稼ぎました。

どうしてこのように清廉潔白な人間が、隣人のために自分の命を犠牲にした人間が、認知されないのでしょうか。どうか忘れないでおきましょう。ドイツ連邦共和国の成立後、数え切れないほどのナチスがその官職に止まりました。ニュルンベルク人種法を解釈し、ヴァンゼー会議に連署したグロプケ氏のような男が、ドイツで最高位の官吏になったことを。また官吏機構や教授連、判事たち、医師たちなどの一部は、残念ながら、上手にナチスであることを覆い隠し、罪なき者であることを前面に押し出すのに成功しました。彼らはナチスでしたし、ナチスのままでした。当地の地裁裁判長、オープスト「エラー」ス女史が、ほんの数年前に、ナチ時代のメンヒエングラットパツハにおける司法史を徹底的に

解明したことは、大変な功績です。どうか忘れないでください。六ヶ月程前に「二〇〇七年現在」なつてはじめて各紙が報道したのですが、ドイツ連邦政府は、アイヒマンのようなとんでもない戦争犯罪人がどこに滞在していたかずっと知っていたといえます。ゲルシュタインのような人物は、戦後、やっかいな存在でしかなかったのです。

ユダヤ人歴史家レオン・ポリアコフは、戦後次のように語りました。「私たちの個人的な確信を二文で表現するなら、ドイツ人ゲルシュタインは異邦人の中に存在した義人の一人である。彼の名前は、高潔な、苦悩する良心をもった一人の人間として歴史に記憶されるに値する」と。

ニメラー牧師は、語っています。「彼は、ずば抜けた勇気をもっていた。彼は、肉の体を持つことのできる以上の勇気をもっていた」と。

一九六三年ロルフ・ホーホフトは、彼の戯曲『神の代理人』の中で、クルト・ゲルシュタインという人物を正當に評価しています。バチカンはその戯曲を教皇のホロコーストへの対応に対する不当な攻撃と見なしています。この歴史の客観的な徹底した研究は、文書が封印されているため、今もってなされていません。

一九六七年にサウル（ソール）・フリートレンダーが初めて単行本『クルト・ゲルシュタイン、それとも善の葛藤』を、まずフランス語で、一年後にドイツ語で出版しました（石井良訳、『抵抗のアウトサイダー』産業行動研究所、一九七一年）。これについて、次の点を考慮に入れねばなりません。サウル（ソール）・フリートレンダーの両親は、アウシュヴィッツで殺害されたことを。彼の両親は、プラハから南仏まで逃れてきました。両親は七才になる息子を修道院に預け、その名前をサウルからパウル（ポール）に変えました。二人は、更なる逃避行で、フランス経由でスイスに到着しました。しかし退去命令を受け、スイスの官憲によってフランス人に引き渡され、フランスからガス室に送られました。

一九六八年、ピエール・ジョフロワは、『神の送ったスパイ』という「ゲルシュタインの」伝記を公開しました。一九九五年には改訂増補版として『クルト・ゲルシュタイン 親衛隊将校の抵抗』が出版されました。

私は、クルト・ゲルシュタインについて一九七八年に最初の講演を行いました。その講演で、「子供の頃と青少年期

に、私の両親と並んで、私にこれほど深い影響を与えた人物はいない」と語りました。私は、とりわけゲルシュタインが自殺をしたという立場を主張してきました。私は、嘘が広がったせいで、様々のところから故なき批判を被ってきました。クルト・ゲルシュタインが所属していた学生組合においてさえも、ゲルシュタインはほんの数年前まで正体不明の存在でした。

一九七八年に私は、今日の私たちにとってクルト・ゲルシュタインがどのような意味を持っているのかという問題を提示しました。

- 1、私たちドイツ人にとって、彼はおおそやかい存在です。
- 2、外国にとつて、ゲルシュタイン報告は、連合国と中立国の、とりわけピウス一二世の消極性を非難しています。
- 3、ユダヤ人にとつて、善良な親衛隊がいたなどということは、ユダヤ人の主張に直接対立します。

一九九三年に私は、クルト・ゲルシュタインについて二回目の講演を行い、一九七八年の講演から何ら撤回すべき点はないと語りました。その間に、ほとんどのことは歴史的に証明されました。既に語りましたように、大きな突破口が、ようやく一九九九年、つまり戦後五〇年たつて訪れました！二人のオランダ人がロンドンのオランダ亡命政権の公文書を徹底的に調査し、そこで一九四三年春の「オランダ語のゲルシュタイン報告」を発見したのです。ロンドン、ワシントン、スウェーデンそしてスイスの政府が情報を受けていた事を示す明確な覚え書きをも発見しました。英国の公文書も調査され、ゲルシュタイン報告が受理されていたことが確認されました。それなのに、戦争中、何も起こらなかったのです！

一九九一年、私は、フランスのロータリー・クラブで、クルト・ゲルシュタインについて講演をしました。とりわけ、私の友人ゲルト・ヴァインシュタインの夫人の伝記についても語りました。ゲルト・ヴァインシュタインは、ビスマルク通りのハイネマンの向かいで一九二四年に生まれました。彼の妻ヘルガの両親は、ベルリンから逃亡し、南仏にまでやってきました。当時の占領されていない地域のフランス・ヴィシー政権は、一六才以上のユダヤ人全てをドイツに引き渡す取り決めにヒムラーと交わしていました。それで九才のヘルガは、クエーカーの孤児院に残りました。一年後、

ヴィシー政権の〔ピエール・〕ラヴァル首相は、報復する危険を有する人物を国内に留め置くつもりがないので、子供ユダヤ人をもドイツに受け容れるよう要請しました。そのヒムラー宛の電報が公文書として保管されています。ヒムラーは、喜んでこの願いに応じました。孤児院では、すでに五人の子供たちが選別されていました。一人のフランス人農家がこの五人の子供たちを引き取りました。そこでヘルガは生き延びました。ヘルガが私という人間——しよせんドイツ人の私——を受け容れてくれたことを、私は何年もの間、理解できませんでした。その気持ちを皆さんは分かっていたはずです。それは彼女にとって容易なことではありませんでした。しかし、長い歳月を経て、彼女はもう一度ドイツに戻ってきました。そのように、私の人生は今日に至るまで、再三再四、私たちドイツ人が犯した罪の刻印を帯びてきました。

フランスのみならず、他の占領地域においても、ユダヤ人は現地の警察によってドイツに引き渡されました。一九四〇年に国防軍が占領した唯一の英国領の島においてさえ、巡査が土着のユダヤ人をドイツに引き渡しました！ イタリアとデンマークのみが、彼らの国のユダヤ人が根絶やしにされない道を見つけたのでした。

私は生涯にわたってこのテーマと取り組んできました。そこからどのような結論を引き出せたのでしょうか。キリスト教会は、何百年にもわたってユダヤ人に対する敵対心をあおってきました。それがナチの犯罪的理想に合致しました。そこに、止まるところのない強欲が加わりました。その点について、またしても私たちは嘆かねばなりません。ほとんどのユダヤ人は貧しい人々ではありませんでした。そしてお金は戦争に不可欠でした。それ以上に、学問や文化領域において、ユダヤ人は、多くのキリスト者が相当の嫉妬心を懐くほどエリートを有していましたから、彼らは好かれませんでした。ヨーロッパでこうしたユダヤ人排斥問題を認識し、見直すことを決断するまでに、四〇年、いやそれ以上の歳月を要しました。

クルト・ゲルシュタインも、彼の家族や関係者の大半から、また福音主義教会から当然の敬意が払われるまで、五〇年以上の歳月を要しました。世紀も変わってやつと数年前に、ドイツ福音主義教会最高議長である〔ヴォルフガング・〕フーバー監督が、クルト・ゲルシュタインを、デイトリヒ・ボンヘッファーに並ぶ抵抗の戦士と呼べる存在であると

表明しました。では、ボン・ヘッファー自身が公に認められるまで、どれほどの期間を要したのでしょうか。ベルリンのドイツ抵抗〔運動〕館もやっと七年ほど前からクルト・ゲルシュタインの名前を掲げるようになりました。

戯曲『神の代理人』に基づく、ゲルシュタインはバチカンにとつて、正体不明の存在としてやっかい者扱いされていましたし、今日に至るもそうです。二年ほど前から、教皇が沈黙していたことに対するまったく新しい弁解が流布しています。つまり、教皇は政治的に賢明な理由から沈黙したというものです。ユトレヒト出身でオランダ人のデ・ヨン枢機卿が一九四二年にユダヤ人の殺害に反対する司教教書を作成したというなら、その後、すぐに逮捕の波が始まったはずですが、〔が、何もありませんでした〕。現在のバチカンの主張はこうです。ホーホフートが、工作員としてロシア人に雇われて、教皇を中傷するために一九六三年、戯曲を書いたと。『南ドイツ新聞』（二〇〇七年三月一四日）は、それに対する立場を表明し、法的に当然受けるべき刑をバチカンの外交的援助によって免れた多くのナチの大功の名前を挙げました。この講演の三週間ほど前、『シュピーゲル』誌二〇〇七年五月二五日付けの第二号で、ロルフ・ホーホフートは、バチカンの悪意ある主張に対して、遺憾の意をシュピーゲル流の専門用語で返しました。

皆さんは、クルト・ゲルシュタインのテーマが今日でもどれほど現在のテーマであるかお分かりいただけるでしょう。バチカンは、この危機的な時代の公文書を未だに公開しようとせず、封印したままです。公文書の公開のために尽力することへの同意を、今年のホロコースト〔追悼〕記念日にイスラエル駐在ローマ教皇大使との一騒動をとおして得ることができました。これがどう展開していくのか、私は緊張しながら見守っていきます。

マルティン・ルターは、若き神学者のころ、ユダヤ人についてかなり肯定的に発言をし、ユダヤ人とキリスト者との密接な関係を強調していました。それに対し晩年のルターは、ユダヤ人に対して罪を犯す以上のことをしました。彼の最後の説教で、酷い反ユダヤ主義的な命題を主張しました。ベルリンのフンボルト大学で新約聖書とユダヤ・キリスト教研究を専門にするペーター・フォン・オステン・ザッケン教授は、五年前、その著書『マルティン・ルターとユダヤ人』でこの点について述べていました。ナチは、ルターの「シナゴグ（ユダヤ人の教会・礼拝堂）を燃やせ！」という挑発に徹底して従ったのです。当然、福音主義教会は、まだまだいくつかの問題を徹底的に論究せねばなりません。

悪辣なユダヤ人がキリストを十字架に架けたというキリスト教会の煽動は、戦後も久しく続き、やっと止まりました。私はさらに学びました。「彼の血は、私たちと私たちの子供たちの上に降りかかってくる」ことと、裏切り者はユダであつたことを！ 今日、私たちはみな幸いなことに、イエスもマリヤもヨセフもすべてユダヤ人であつたことを学習しました。これは、積極的思考転換の始まりであり、そのことを私は感謝しています。

今年の受難節の聖金曜日に、ART Eはクルト・ゲルシュタインについての映像番組を放送しました。この映像番組で私にとって最も重要な箇所は、サウル（ソール）・フリートレンダーの証言でした。フリートレンダーは、ホロコースト史について最もよく知る定評ある専門家として、今年「ライプチヒ書籍見本市賞」を獲得しました。一週間前、彼は今年度の書籍出版界の平和賞を同時に受賞することが明らかになりました。すでに語りましたように、フリートレンダーは、すでに一九六七年にクルト・ゲルシュタインについて執筆しておりました。前年の聖金曜日に彼は、当時まだクルト・ゲルシュタインという人物について疑念を懐いていた、と私たちに言っていました。しかし、昨今の研究で、クルト・ゲルシュタインが徹頭徹尾、誠実で信頼に足る人物であつたことが証明され、彼の清廉潔白さに対するわずかの疑念も拭い去られたと言います。

ユダヤ人の側からは、まだまったく認められていません。ゲルシュタインにはガス室用のガスを納入した点で罪があると考えています。これは、確実に総てのユダヤ人にとって重大な論点です。しかし、ゲルシュタインがナチスの犯罪的行動に関与しなければ、その残忍な真実を世界に伝えることはできなかったことを理解せねばなりません。彼は、何度もガスの納入を阻止するために、繰り返し最善を尽くしました。残念ながら彼のできることは高々しれていました。彼一人ではホロコーストを押しとどめることはできませんでした。それゆえ、ドイツは戦争に敗北せねばならない、と彼は考えました。ゲルシュタインや他の人から公表されていたナチの犯罪を止めるために、西欧キリスト教世界が事実上、何一つしなかったことは恐るべきことでした。私は、ユダヤ人の諸団体も、クルト・ゲルシュタインがユダヤ人のために犠牲となる覚悟のできた全く数少ない隣人の一人であつたことを認めてくれるであろうという希望を捨てません。彼は、本物のキリスト者でした。私は、彼を賞賛し尊敬することを決して止めませんでした。

今からおよそ三〇年前と一五年前に行った二つの昔の講演の結びで、私は、聴講者と私自身に対して問いかけてました。「いつたい私たちは、抑圧され苦しんでいる隣人のために、私たちの名誉、家族、そして命を賭する用意があるでしょうか。ゲルシュタインは、それを行ったのです！」。

私の講演を終えるに当たって、私の親戚の女性、ゾーエスト出身のウルリケ・ザッセⅡフォスヴィンケルの詩を引用したく思います。彼女は二〇〇一年に、一九四二年までのゾーエストにおけるユダヤ人の生活について著わしました。一九四二年、新聞では、ゾーエストはユダヤ人に穢されていない町だと説明されていました。

## ユダヤ人墓地の石

想いの担い手たちは  
想起してほしいと願う

石に込められた祈りを永遠に

手の中で暖められ  
墓に供えられた

その石に込められた思いを私たちは  
生涯にわたって引きずらねばならぬ

地上のいずこにも

措き去るところはない